

特集

飛び出せ OT! 子ども支援の虎の巻

編集担当 灘 裕介

発達系作業療法の役割の変化と今後

—制度の変化や活用を踏まえて

酒井 康年 ————— ●383

学校訪問を通じた作業療法実践

高畑 脩平 ————— ●389

特別支援学校における作業療法士の役割と実践

鈴木 留美子 ————— ●394

重症心身障害児・者施設での作業療法士の役割

—常同行動がみられるケースに学んだことから

作業療法士の役割を再考する

久保 友明 ————— ●399

脳性麻痺児に対する作業療法の実践

岩下 範子, 他 ————— ●405

烈闘作業療法

「相手との時間は埋めなくていい」

という感覚 (大越 満さん)

————— ●376

レストラン OT 奮闘記—汗と涙の就労支援
人に合わせるか企業に合わせるか
—「こだわり」を巡る飲食店の葛藤

仲地 宗幸 ——— ●424

OTケアマネジャーはこうした！
みんなが来る家で暮らしたい
—息子の家から自分の家へ

丸子 佐和子，他 — ●428

これから臨床実習にでる君へ
知る，伝える，経験することで理解を深める

朝倉 起己 ——— ●433

複眼で見る
障害者差別解消法の社会的意味

細田 満和子 ——— ●437

片麻痺の方への促通反復療法 OT 実際編
手関節・母指の促通手技

大郷 和成 ——— ●440

らんどまーく
あれこれ考えます

山田 純栄 ——— ●374

OTとして私が大切にしていること
精神科デイケアの中で OT として考えること

並河 勇志 ——— ●411

なんでもできる 100 均グッズ
ウッドピンチでクリスマスリース

平山 澄佳，他 ——— ●414

掘り起こせ “やる気” OT スコップ隊 認知症の人編
家族からみた認知症の症状（その 7）

上城 憲司，他 ——— ●417

女性 OT ひとりで悩まないで
母としての時間と，OT としての成長の時間

宇田 薫，他 ——— ●418

私が出会った作業療法
支えがあるから頑張れる
—生活につながったもの

戸村 光義 ——— ●420

作業療法周辺のニュース ——— ●446
カメラマン川上哲也の見た世界 ——— ●目次前
既刊案内 ——— ●432

はじまりのことば…川口 淳一 ——— ●巻頭頁
インフォメーション ——— ●416
次号予告 ——— ●449

「相手との時間は 埋めなくていい」 という感覚

大越 満さん

東京ふれあい医療生活協同組合

●梶原診療所

●オレンジほっとクリニック

OT 24 年目、新潟県出身

今回は、東京の下町で訪問リハに携わっている大越満さんを取材した。優しくてほっとする人柄のうちに、並々ならぬ情熱をもった大越さん。訪問指導に携わったことをきっかけに在宅のおもしろさを知ってから、行く先々で訪問リハ開設などに取り組み、道を切り開いてきた。

訪問リハは、在宅医療が重視される地域包括ケアシステムにおいて、今後ますます重要な役割を果たすことが期待されている。「OTらしい訪問リハとは?」「訪問リハで大切なことはなんだろう」。取材を通し、大越さん流の答えがみえてきた。(編集室)



インタビューの様子がムービーで
ご覧になれます

飛び出せ OT！ 子ども支援の 虎の巻

日本作業療法士協会の「第二次作業療法5ヵ年戦略」において、特別支援教育に関与することが重要項目として挙げられている。その背景には、就学前には気づかれにくかった、学習面や対人コミュニケーション面などの課題がピックアップされることが多くなってきていることや、特別支援教育の一視点から作業療法の活用も明文化されていることがある。

また2012年4月より、児童福祉法の改定により、放課後等デイサービスや保育所等訪問支援事業が創設され、障害をもつ子どもに対する支援の充実も図られ、福祉サービスを利用する子どもに対して、OTが関与する機会が増加している現状がある。

一方で、特別な課題をもつ子どもは、早期発見・早期療育といった形で支援が開始されることが望ましいが、まだまだ低年齢のうちには、課題をもっていても保護者には気づかれない場合や、医療機関への受診を躊躇する場合も少なくない。そのような現状の中で、保育所・幼稚園においても、なんとなく心配と感じるようなお子さんや、集団運営に関する困り感が増大している。そのような課題を取り上げ、市町村自治体が、その自治体単位で、支援の充実を図るために専門家を活用することも見受けられるようになってきた。OTも、その支援の担い手になっている。

このような社会的な変化の中で、OTはより幅広く対象を広げ、その専門性を他職種と共有し、協業・分業していく必要が高まると思われる。皆、日々、悩みながら作業療法を実践し、その振り返りを行うことで、自分自身の作業療法の妥当性を確認し、よりよい治療実践へとつなげていることと思う。

今回の特集では、社会的変化に伴い多様化する作業療法の1例を示し、今後の課題を含めたうえで、OTがどのような活躍をすべきかを、悩みながらも日々の実践に向き合い、模索しながら1つの作業療法の形をつくろうとしていて、かつ次世代をリードしていく立場のセラピストの視点から報告する。

編集担当：灘 裕介

〔(有) あーと・ねっと〕

発達系作業療法の役割の変化と今後 —制度の変化や活用を踏まえて

Yasutoshi SAKAI

酒井 康年

うめだ・あけぼの学園，作業療法士

内容を理解するためのキーワード ● インクルーシブ社会の実現 ● 後方支援 ● マネジメント

子ども支援のポイント

- 福祉と教育の大幅な制度改革により，子ども支援における多職種のチームアプローチの取り組みが拡充してきている。
- 学校や保育園などにおける支援では，狭義の作業療法の提供ではなく，現場の先生たちが現場でできることの具体的提案が求められる。

はじめに

まず，表1をご覧ください。この表は，2012年から2014年までの3年間にわたる，児童発達支援センターに勤務する筆者の業務の一部を内容別にカウントしたものである。筆者がよく受ける質問の1つに，「どうすれば地域に飛び出すことができるのか？」がある。その答えの1つが，この表である。地域に出るには，ボランティアではないので，制度としての背景を整理し，把握することが必要である。ここに挙げたような制度を活用して地域に出ている。さて，本特集は「飛び出せOT！」であり，特集での筆者の役割は，近年の制度的変化を概観することである。制度が変化し，社会的背景が変化したこと，筆者が児童発達支援センターに所属していることなどの要因によって，結果この表内の業務が実現したといえる。そこで本稿では，制度の変化を概観し，変化の影響の一端を紹介することで，OTが地域で求められていることを確認したうえで，実践例を紹介したい。まず，この表のスタートがなぜ2012年なのか，そこから話を始めたいと思う。

学校訪問を通じた作業療法実践

Shuhei TAKAHATA

高畑 脩平

- 白鳳短期大学 総合人間学科 リハビリテーション学専攻、作業療法士
- 奈良県障害者総合支援センター

内容を理解するためのキーワード ● 特別支援教育 ● 子ども地域支援療育事業 ● 多様性

子ども支援のポイント

- 小学校での作業療法においては、「医療の個別性」と「教育の平等性」という文化的な相違を念頭に置く必要がある。
- 教育におけるトップダウン構造を念頭に置き、働きかける必要がある。
- 作業療法は、1人ひとりの特性を理論的に説明づけられることが強みであり、近年注目されている「多様性」を理論的に裏づけることができる。

はじめに

筆者が所属する、奈良県障害者総合支援センター（以下、当センター）では、2010年度より奈良県障害福祉課より業務委託を受け、「子ども地域支援療育事業」を開始した。子ども地域支援療育事業とは、奈良県内の施設（保育園・幼稚園・小学校・中学校・療育教室・学童保育・児童デイサービス）からの依頼に基づき、OTが施設を訪問しコンサルテーション支援を行うものである。2010年度より開始し、毎年約200件の訪問を実施している。

そこで今回は、奈良県で展開している子ども地域支援療育事業に関して、①事業が委託された経緯と、②小学校での作業療法実践の2点に焦点を当て報告を行う。

事業が委託された経緯

事業が当センターに正式に委託されたのは、「奈良県発達障害児医学的療育支援事業」のコンペティションによる採択の際である。その際に提案した「奈良県版地域支援モデル」（以下、本モデ

特別支援学校における 作業療法士の役割と実践

Rumiko SUZUKI

鈴木 留美子

京都府立宇治支援学校，作業療法士・自立活動教諭

内容を理解するためのキーワード ● 特別支援教育 ● 自立活動教諭 ● 連携

子ども支援のポイント

- 京都府下においては，OT が特別支援教育を発展させるうえで必要な専門職として認められ，特別支援学校で，OT が自立活動教諭の特別免許状を授与され，採用された。
- 校内では，自立活動教諭として，学習上，生活上の困難さに対して実践的な支援を推進し，学級担任と協業して教育活動を行っている。
- 児童・生徒が楽しく生き生きとした学校生活を過ごせるように，障害特性や人，環境を見極めながら状況に合った具体的な支援，助言が継続的に行える，「内部専門家」としての役割を果たしている。

はじめに

筆者が勤務する京都府立宇治支援学校（以下，本校）は，京都府宇治市の市街地に位置し，2011年4月に開校した，京都府立の特別支援学校としては一番新しい学校である。本校では，小学部から高等部までの知的障害，肢体不自由のある272名の児童・生徒が学習を行っている（2016年5月1日現在）。また，校内には発達障害を含む京都府内のすべての障害のある子どもたちの支援を行う「京都府スーパーサポートセンター」が設置され，京都府における「特別支援教育の拠点校」として位置づけられている。

筆者は，12年間，小児医療施設でOTとして勤務した後，多様な教育ニーズに対応するため，2012年より，教員免許を有しない非常勤講師として3年間，週4日勤務し，京都府教員採用試験を経て，2015年に自立活動教諭特別免許状の授与を受けた。その後，京都府下では初めての常勤の自



重症心身障害児・者施設での 作業療法士の役割

—常同行動がみられるケースに学んだことから 作業療法士の役割を再考する

Tomoaki KUBO

久保 友明

訪問看護ステーション 木の実（元 伊豆医療福祉センター）、作業療法士

内容を理解するためのキーワード ●重症心身障害児・者施設 ●行動の意味 ●生活の場

子ども支援のポイント

- OT が、意思の表出が困難なケースの行動の意味を読み解き、伝えたいことを見出し、周囲の人たちに伝えていくことで、周囲の人たちがケースと関わりやすくなる。
- 重症心身障害児・者（以下、重心）施設では、ADL や医療行為が病棟スタッフの関わりを中心となっており、入所者は受身的な生活を送っている。その背景も含め評価し、介入していく必要がある。
- 重心施設では、入所者の生活の場に直接入ることができ、入所者と日常的に関わっている病棟スタッフとも関わりをもてる。そのため、個別的なセラピーだけでなく、生活の場での生活支援を行える。

はじめに

重症心身障害とは、重度の肢体不自由と重度の知的障害とが重複した状態をいい、その状態にある児や成人した人を含めて重症心身障害児・者（以下、重心）と呼ばれている¹⁾。また、重心施設は、2012 年度より児童は医療型障害児入所施設、成人は療養介護事業所に変更となった^{2, 3)}。今回、常同行動の存在が生活上の課題になったケースの経験を通じて、重心施設での OT の役割について再考したことを以下にまとめる。

ケースについて

本ケースは A さん、重心施設に入所している 30 歳代の女性である。診断名は小頭症で、知的障害、

脳性麻痺児に対する作業療法の実践

Noriko IWASHITA

Miyuki ONITSUKA

Izumi HAYASHI

岩下 範子^{*1}，鬼塚 みゆき^{*2}，林 いずみ^{*1}
*¹北九州市立総合療育センター，作業療法士*²北九州市立総合療育センター 西部分所，作業療法士

内容を理解するためのキーワード ●主体的な「活動」「参加」 ●地域資源の活用と連携
●OTに求められる役割

子ども支援のポイント

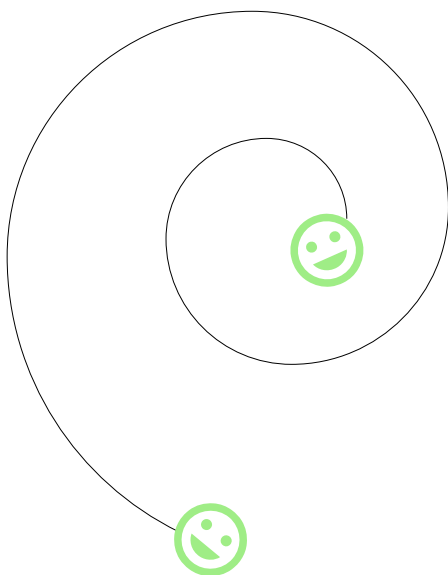
- 効果的な支援には，従来の施設機能にとどまらない，幅広い地域資源の活用・連携が必要である。
- 連携の中で OT に求められる役割は，生活環境を把握し，子どものもつ能力を最大限に発揮できる手段を考え，それぞれの場所において主体的な生活を可能にする具体的な方法を提案することである。

はじめに

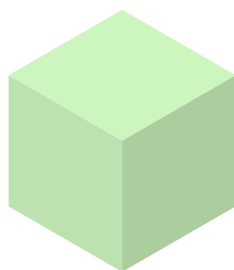
発達障害における作業療法は，早期療育における障害軽減に対する医療中心アプローチから，地域生活支援のための医療，福祉，教育の連携による子ども中心，家族中心，クライアント中心の作業療法へと発展してきた¹⁾。周産期医療の発展により，脳性麻痺がある子どもたちは，重度重複障害をもつ子どもと，軽度の微細な障害をもつ子どもとの2極分化が起こっており，対象とする児によって作業療法に求められる内容も異なっている。

重度の子どもに対しては，その児が行う日常の活動に合った姿勢管理を基本として，食事介助の方法などを中心としたADLへの介入，感覚運動・遊びの経験拡大などを行い，家族を含めて健康で楽しく生活できるように支援していくことが必要である。一方，軽度の子どもに対しては，年齢や発達の状況に応じて，ADLの自立や社会性の獲得を見定めた支援が重要である²⁾。

北九州市立総合療育センター（以下，当セン



OTとして 私が 大切にしていること



精神科デイ ケアの中で OTとして 考えること

こころのクリニック 西尾

並河 勇志

「OTとして私が大切にしていること」というテーマでの依頼を受けた際、OTになって15年程度の経験のひよっこなのに…と思いました。15年が長いのか短いのか、まだまだ初心者と思っているけれど、中堅くらいの位置にいるのか？などと考えてしまいました。本稿は、自分の普段の思いが伝わるようにと砕けた表現で書いています。ご容赦いただけると幸いです。

私自身は臨床経験の15年間のうち、ほぼすべてを精神科デイケアの中で過ごし、多職種にもまれながら勤務してきており、「OTの並河」ではなく「デイケアの並河」と呼ばれることが当たり前になっています。精神科デイケアという場でのOTの専門性とは何かについて、自分なりの考えを述べたいと思います。

OT よく実習生から尋ねられて困る質問 「なぜOTを選んだのか？」

高校卒業間近になり、それまで就職するつもりだった私が急に進路で迷い、担任に相談したところ、「(ぱっと見、ちゃんぽらんなので) 長く付き合えないと分からないけど、人を助けるような仕事が向いていると思うよ」と、すぐに2カ所の専門学校を勧めてくださった。その言葉がなんだか嬉しくて、よく分からないまま2校とも受験し、運良く合格。介護福祉士とOTのどちらかを選ぶことに。その時になるまで忘れていた、というか意識していなかったが、実は姉もOT。姉の勧めもあり、OTの道へ進むこととなる。…だから、キラキラした目で尋ねられると、なんとなく後ろめたい気分。ただ、振り返ってみると、自分の原点はここにあるのだと思う。単純に「人を助ける仕事」をしたい。それは今でも変わらず、当時を思い出し、担任の林先生に感謝したりしている。

私が出会った作業療法

支えがあるから頑張れる —生活につながったもの

執筆者：戸村 光義

紹介者：山田 愛，笛木 沙織
(西那須野マロニエ訪問看護ステーション)

突然の告知

診断を受けたのは72歳の時でした。筋力低下は感じていましたが、妻と田圃や畑をしたり、寺院に参拝に行ったり、普通の生活を送っていました。しかしある日、突然意識を消失し、病院へ搬送されました。気づいた時には病院におり、はっきりと意識が戻ったのはその日の夕方でした。

治療を受け、主治医から筋萎縮性側索硬化症（以下、ALS）の告知をされました。何も分からない状態でした。しかし、胃瘻や気管切開が必要になると聞いて、これはもう駄目だと思いました。それで、今後のことは子どもたちに任せようと思い相談すると、長男からは、「できるなら少しでも生きてもらいたい」と言われました。自分はもうこのまま何もなくていいと思っていたのですが、子どもらがそう言うのであれば、少し頑張ってみようと思いました。主治医の先生にも、できるだけ処置はしてもらいたいと伝えました。

入院生活の中での支え

入院してすぐ鼻のマスクの人工呼吸器を着けて、1週間ほど過ごしました。知人の見舞いもあり、心が休まり、支えられた感じがしました。さらに、入院中に初めてリハを受けました。起き上がったたり、歩く練習をしたり、食事をしたりと自分でできることがいろいろあり、それも支えとなりました。

リハのスタッフは、身体のことをよく分かってくれました。入院中に、自分ができることを発見することができ、リハを受けて生活に張り合いが出てきました。1カ月程の入院で治療が落ち着き、身体が退院できる状態に近づいてくると、入院当初はいつ逝っても構わないと思っていましたが、家に帰った



レストランOT奮闘記

—汗と涙の就労支援

人に合わせるか企業に 合わせるか

—「こだわり」を巡る飲食店の葛藤

仲地 宗幸

(株)NSP キングコング



はじめに

最近は何かと「こだわり」や「プレミアム」などのキャッチコピーが散見され、特に食品に多いように思われる。いうまでもないが、これは生産者のこだわりのことを指しており、「効率度外視で手間暇かけて作っています」ということを消費者に伝えたいわけである。面白いと思うのは、われわれ専門職は、どちらかというところ、このこだわりを障がい特性とみてしまうことが多い。企業においてはこのこだわりを強みに変え、商品の付加価値にさえているのに、専門職は「障がい」と呼び、時にその力を弱めるように働きかけることも多い。

障がいとはどのようなことを指すのかについては、紙面の都合上ここで語ることはできないが、障がい者雇用を行ううえで大切な視点は、障がいとは「本人の生きづらさ」のことをいうのか、それとも「企業が本人に対し感じる使いづらさ」を指すのかを間違わないことである。できることなら本人のこだわりを企業の強みとして活かしていきたいものだが、業態や能力によっては、必ずしもこだわりを強みに変えられるポジションを創り出すことはできない。むしろ多くは、やはりこだわりが企業の不都合になってしまう場合が多いのではないかな。それでは、このこだわりとは何なの

か、雇用現場において、これとどのように折り合いをつけていけばよいのかについて、今回は考えてみたい。



生活のリズムを変えたくない本人の こだわりと、柔軟にシフトを組みたい 企業との葛藤

前回の本コラムでは良治君を紹介し、彼がキングコング（私が勤める(株)NSPが経営する焼肉店）で働くことになるまで、そして洗い物にしか関心が向かなかった彼が、ピザ生地作りまで行うようになった経過を報告した。「洗い物しかやらない」と頑なだった彼の状況は、ともすれば作業に対するこだわりが強いという言葉で片づけられていたかもしれない。しかし、それを本人と環境に対する働きかけにより、少しずつ変えていったのである。

良治君のこだわりについては、もう1つ大きな壁があり、それを巡っては企業側と支援者側で大きな議論を生んだことがある。今回も、大石店長と共にそのことを振り返ってみようと思う。

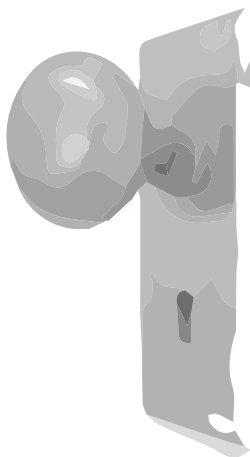
仲地 さてさて、良治君も勤務開始から半年が経ち、業務もだいぶ慣れてきたんじゃないですか？

大石 彼自身も、できることが増えたのが嬉しかったのでしょう。とてもやる気に溢れていました。誰よりも大きな声で「いらっしゃいませ」と言うので、周りもつられて声が大きくなっていました。そして、店全体が元気になっていくのが

11

OTケアマネジャーは こうした！

みんなが来る家で暮らしたい
—息子の家から自分の家へ—



丸子 佐和子*

三浦 晃**

大塚 英樹*

*指定居宅介護支援事業所 せんだんの丘、介護支援専門員、作業療法士

**介護老人保健施設 せんだんの丘、支援相談員、作業療法士

はじめに

今回は、転倒というアクシデントで急に介護が必要になり、息子の家で暮らすことになった高齢の女性、Aさんの事例をご紹介します。支援した約3年半の間に「自宅で暮らしたい」というAさんの希望を実現し、継続していくためにケアマネジャー（以下、ケアマネ）として関わりました。OTであれば目標の達成や入院など状況の変化によって事例の担当を離れますが、ケアマネは状況が変化しても関わりを継続できます。状況が変わっても、いつも「自宅で暮らしたい」と言ったAさんへの3年半の支援をご紹介します。

事例紹介

Aさん、80歳代後半、女性、一軒家に独居。ADLは自立、自宅内は独歩、屋外は杖歩行レベルで、近所のスーパーや病院までは歩いて行ったり、バスやタクシーを利用し、少し離れた病院まで出掛けたりすることもできていました。料理は自分で行い、掃除や買い物は長男の支援を受けていました。近所の友人や親戚との交流も多く、姪と一緒に特別養護老人ホーム（以下、特養）に歌のボランティアに行くこともありました。

約3年半前、Aさんは1人暮らしの自宅で転倒しました。数日後から動けなくなり、B病院に入院。骨折の所見なく、疼痛のため動けない状態でも退院しなければならず、次男宅へ退院しました。次男宅でも寝たきり状態で、地域包括支援センター経由で介護保険申請し、要介護認定が出る見込みで、筆者が担当することとなりました。Aさんは、「みんなに迷惑をかけないようにしたい、いずれ家に帰りたい」と希望されていました。



知る，伝える，経験すること で理解を深める

朝倉 起己 (共和病院 作業療法課)

はじめに

筆者がOTになって、もうすぐ20年になります。ずっと同じ精神科の病院で勤務しており、毎年2〜3名程度の臨床実習生の担当をしていますので、かれこれ50名以上の学生さんに関わらせていただいたことになります。しかし、どれだけ経験を重ねても、「これでよかった」というような自信や満足を得ることは稀で、実習指導も成功と失敗の繰り返しです。学生さんと共に、臨床実習という共同作業を通じて日々学び合っているところです。

今回は、これから臨床実習にでるみなさんが、少しでも気が楽になり、程好い緊張感をもって実習に臨めるよう、筆者自身の経験談を紹介しようと思います。

対話を通じて知ること

「指導者はどんな人だろう」「優しい人？ 厳しい人？」「うまく付き合っていけるだろうか」「課題は多いかな」「土曜日や日曜日でも実習はあるのだろうか」「夕方何時まで実習はあるのか」「ほかにも実習生はいるのだろうか」など、実習に臨む学生さんは、誰もがきっとドキドキしていることでしょう。

臨床実習に臨む学生の心得は本コラム第1回¹⁾にありますので割愛しますが、まずはこのドキドキ感(緊張)を解すところから実習が始まります。その手段として、筆者は対話を通してなるべく自身と学生さんの共通項を見つけるようにしていま

す。たとえば、出身地、出身校、恩師、これまでの実習先、自身の趣味、休日の過ごし方、好きな食べ物…など、なんでも構いません。お互いがいわゆる自己紹介をし合って、共通事項を見つけるようにします。「同じ実習先で経験したんだ」「共通の知人(OT)がいる」「趣味が一緒」などの共通項が何か見つかるとなんとなくホッとし、安心感が生まれます。

実は、指導者側も結構ドキドキしているものです。「今度来る学生さんはどんな人かな」「元気な人？ 大人しい人？」「社会人経験者？」「体調管理は大丈夫かな」「精神科に興味をもっている人かな」「キチンと伝わるように指導できるかな」などと、いろいろ想像しています。そして、分からないことは何気なく尋ねるようにして、学生さんについて知ろうと心がけています。この知るという行為が安心感に繋がり、お互いを知り合うという過程が実習を行ううえで重要になってきます。指導者にしろ、担当患者さんにしろ、まずは対話を通して“知る”ところから始めてみてはいかがでしょうか。

臨床についても、始めから何もかも知っている人などいません。知らなくて当たり前です。知らないことを恥ずかしがったり、知ったかぶりせずに、素直に聞いて学ぶ姿勢で取り組むことが大切です。そうすれば、もしかすると「この学生、積極的だな」と指導者や担当患者さんにも思ってもらえるかもしれませんので、ぜひいろいろ聞いて尋ねてみるとよいと思います。



複眼で見る

障害者差別解消法の社会的意味

星槎大学 副学長

細田 満和子

▶ はじめに

障害者差別解消法が2016年4月から施行された。本誌読者の皆様の中には、何が変わったのか、これまでとそんなに変わらないのではないかと、という感想をもたれた方も多いのではないだろうか。それというのも、日本にはすでに障害者基本法があり、障害者を差別してはならないことが明示されている。また、OTをはじめとする医療専門職は、学生の頃から継続的に、障害者の権利の尊重、医学（個人）モデルと社会モデルの意味、世界保健機関（WHO）が身体機能のマイナス面を分類する国際障害分類（ICIDH）から生活機能というプラス面で分類する国際生活機能分類（ICF）へ転換したことなどを学んでいるので、障害者を差別するなんてとんでもないことだと考えているからである。

それでは、なぜ、このような当たり前のことが今更法律として制定され、施行されたのか。それは、医療界では当たり前と考えられてきたことが、この社会では実現されてこなかったからにほかならない。患者さんが希望通りに復学できるように、復職できるように、社会生活を送れるようにと、医療専門職は一生懸命リハを行ってきている。しかし、学校や会社や行政などが復学や復職や社会復帰を認めず、患者さんと共に悔しい思いをしたことがある医療専門職の方も多いのではないだろうか。

本稿では、障害者差別解消法を、医療や福祉では当たり前の、障害者の権利を尊重するという考え方が社会の当たり前になる可能性を惹起するものとして捉える。そしてその重要な表れが、障害者が権利を損なわれたり差別されたりする際にとりうる最終手段としての法的訴えと考え、アメリカでの事例をもとに、いかにこの障害者差別解消法が使われうるのかについての示唆を提示したいと思う。

▶ 法的根拠としての ADA

アメリカでは、1990年に成立した「障害のあるアメリカ人法（Americans with Disabilities Act；ADA）」によって、障害に起因するあらゆる差別が禁止されており、ADAは裁判における根拠法になっている。たとえば、2007年5月にマサ

手関節・母指の促通手技

大郷 和成 (NPO 法人 laule'a)

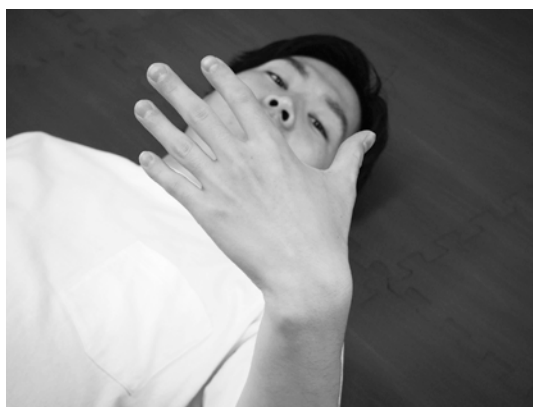
はじめに

今回は、手指伸展位での手関節の促通手技と、手指の促通手技の一部（母指）をお伝えする。促通反復療法では、個々の手指への手技を有している。母指、示指、中指、環指、小指それぞれに、屈曲・伸展の促通運動が可能である。

手関節背屈の促通手技Ⅱ

1. 基本

〔基本姿勢〕



手指伸展，手関節掌屈，前腕回外位で保持する。

〔支え方〕



母指を患者の手背に置き、示指と中指で四指を挟むように保持する。



もう一方の手で、患者の母指全体を包むように保持する。